

「ふね遺産」（推薦様式）：A4 一枚に収め、それ以上は別途資料添付して下さい。

No.(*)	内容	備考
1. 対象物・資料の名称・所属または所有者	対象物：サン・ファン・パウティスタ 旧所有者：旧仙台藩（伊達政宗建造）	非現存船
2. 対象物の作成・存在時期	慶長 18 年（1613）7 月竣工。太平洋を 2 往復した後、マニラで売却された。	
3. 現状（写真添付）	 <p>ローマのボルゲーゼ美術館所蔵の絵画「支倉常長像」の右側に描かれたガレオン船「サンファンパウティスタ（部分拡大）」</p>	 <p>解体前の復元船サンファンパウティスタ（サンファン館にて）</p>
4. ふね遺産認定基準の該当項目(**)	<p>【認定対象】</p> <p>(1) 船舶</p> <p>【認定基準】</p> <p>(7) ふね関連技術と社会・文化の関係上重要な、初めて、または最古のもの</p>	我が国からの使節をヨーロッパに派遣するために建造された洋式帆船としては最初である。
5. 歴史的・工学技術的意義	1613 年代に、伊達政宗の命により建造された当時は、大型のガレオン船であり、我が国最初の外交使節団である「慶長遣欧使節」をスペインへと運んだ船（1613 年出港）であり、太平洋を 2 度横断した歴史的に価値ある船である。本船自体の情報については、若干の古文書と絵画が残されていただけであるが、以下のような基本方針と、専門家による時代考証により復元されたため、全体像や構造がつまびらかとなった。先ず、1990 年に宮城県により地域活性化委事業「文化の波・文化の風起こし」主要プロジェクトとして復元に着手。1992 年に 1. 木造船とする、2. 原則として原寸とする、3. 石巻の地域の造船所で建造する、4. 宮城県の船大工で建造するという 4 つの基本方針の下、建造が開始され、当時の姿を忠実に再現するために、船舶界の権威であった實田直之助博士（元横浜国立大学教授）の監修の上、世界各地の資料を収集し、建造は石巻市の大棟梁村上定一郎氏のもとに参集した船大工達の技術と魂を結集し完成した。この復元船は我が国最大・最後の木造船として、国内外で高い評価を受け、宮城県のみならず日本の至宝と言える。また完成後 2011 年の東日本大震災の大津波を乗り越えた「震災遺構」としての復興の大きな象徴となっていたが、維持・財政上の理由で 2022 年夏に解体された。なお、使節が持ち帰った遺品は 2013 年にユネスコの世界記憶遺産に登録されている。	復元船は「サンファン館（宮城県慶長使節船ミュージアム）」のドックにて繋留展示されていたが 2022 年に解体された。 解体に対しては、日本船舶海洋工学会から保存要望が出された。また保存運動・解体反対訴訟もなされたが叶わなかった。
6. 参考資料・文献（本表に収まらない場合は別途添付する）	<p>1) 石井謙治：伊達政宗の遣欧使節船の船型などについて、海史研究、第 8 号、1967.</p> <p>2) 慶長遣欧使節船協会編：よみがえった慶長使節船、河北新報社、1993.</p> <p>3) 實田直之助：16 世紀 17 世紀の帆船—慶長遣欧使節船の復元に因んで（その 1~21）、日本造船学会誌 778 号（1994 年）～824 号（1998 年）</p> <p>4) 平山次清：慶長遣欧使節船サン・ファン・パウティスタは如何に再建されたか、日本船舶海洋工学会誌「KANRIN」11 月号、2021</p> <p>5) 「復元船サン・ファン・パウティスタ号大図鑑」、公益財団法人 慶長遣欧使節船協会、2019</p> <p>6) 宮城県：SANT JUAN BAUTISUTA ARCHIVES 1990-2021(復元船サン・ファン・パウティスタ号と私たちの 30 年)、2021.</p>	

(\*) No.は学会で記載します。

(\*\*) ふね遺産認定基準の【認定対象】と【認定基準】の項目の内、該当する最もふさわしい項目一つを、文頭の番号で記載して下さい。